

私がつつた幼稚園・保育園(7)

記憶の中の風の抜け道

森下 みさ子

空を飛んだ!?

空を飛ぶ夢を見る子は想像力が豊かだと聞いたことがある。それがほんとうなら、毎日のようにスイスイと空を飛び回る夢を見ていた幼い頃のわたしは、かなり想像力に恵まれていたことになる。自分の例を引かないまでも、土踏まずが十分に育つていず、文字通り地に足のつかない歩き方でこの世界を探索している「子ども」は、人々の想像力の深みにおいて「飛ぶ」イメージと結びつきやすかったのだろう。小さな羽根をつけた赤ん坊の天使も、子どもの代表たるピーターパンも、「子ども」であることの証のように軽々と空に

浮かび風に乘る。けれど自分が、いくら風に吹き飛ばされそうなくらい小さかったとはいえ、この身をもってほんとうに「飛ぶ」とは思いもよらなかった。

近所の私立幼稚園に通い始めたのは四歳、年中さんといわれる年である。幼稚園に通つてまもなく「空飛ぶ事件」が起きた。幼稚園にどんな遊具が置かれていたのかはつきりとは覚えていないのだが、「すべり台」は確かにあった。縁をつかんだ手に感じるかすかな摩擦、お尻から太ももにかけて感じた板の熱さ、そして何よりも高みから風をきつてすーっと降りていく心地よさは、今もなお身体の記憶に刻みつけられている。子どもたちに人気の遊具だったのだろう、その日もすべり台には引きもきらずに子どもたちが並んでいて、いちおう(?)先生にいわれたとおり順番を守って次々とすべり降りていた。いよいよわたしの番になり、さっそうとすべり出した……つもりだったのだが、極端に小さかったわたしは、後ろからすべってきた子どもにポーンと跳ね飛ばされてしまったのだ。その瞬間すべり台のてっぺんから、わたしの体は魔法の粉が降りかかったかのようにフワリと空を飛んだ。気持ちいい! などと思う間もなく、残念ながらお話の世界の住人ではない体は、重たい頭を下にして園庭の砂利の上にコトンと落ちたのだった。

わたしはたぶん泣いたのだろう……が、都合よくその部分は覚えていない。今思うと学生のように若い先生が、まだ舗装されていない道をおんぶして家まで連れて帰ってくれた。首筋に汗をにじませながらわたしを運んでくれた先生は、責任を問われて謝ったりしたのだろうか……わたしの記憶では、母と祖母が頭を下げてお礼をいっていた姿しか思い

浮かばない。その後母に当時のことを聞いたときも、押した子どもは誰だとか幼稚園の責任はどうだとか言われたことはなく、汗だくになって連れ帰ってくれた先生の懸命さに感謝するばかりだった。家の母や祖母が呑気だったのかもしれないが、今ほどには子どもの怪我の責任をうるさくいう時代ではなかったのだろう。

それよりなにより、医者に行つて頭に大袈裟に包帯を巻いてもらつてからのわたしは、とにかく嬉しくて誇らしくて、幼稚園に行くのが俄かに楽しくなつた。一つ上の年長組に兄がいるとはいえ新しい環境に馴染むのに小さな心を碎いていたわたしは、その日から白く輝く包帯頭を見つけた子どもたちから「頭どうしたの?」と、進んで声をかけてもらえる人気者（とは違ふのだけれど……）になつたのだから。傷が癒え、わたしに特別な徴を与えてくれていた包帯がとれる頃には、わたしはみんなと同じ年中さんとして、ひざこずうの擦り傷に塗られた真っ赤なマーキュロのお目様（先生がお目様の形に塗つてくれた）を誇りに園庭を飛び回っていた。すべり台だけは、押されても飛び出さないように少しふんばるようにしてすべっていたけれど……。

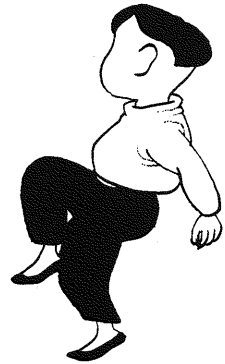
踊り子めざして

ワカメちゃんのような刈上げをしていたわたしからは想像もつかないが、当時流行りのバレエ漫画と、絵本で見た人魚姫が踊るシーンに魅せられていたわたしは、「大きくなたらすらりと手足の伸びた踊り子になろう」と密かに華麗な未来像を描いていた。当時と

しては珍しかったのではないかと思うが、わたしの幼稚園では保育が終わると、希望者対象に保育室を使っているいろいろなお稽古事が開かれていた。一番人気はオルガン教室だったが、わたしの関心はごく少数の子どもしか受けていないバレエ教室の方であった。一度幼稚園から帰って、黒いびたつとしたお稽古着と、上履きとたいして変わらないバレエシューズをもってまた幼稚園に行く。まだ子どもが狙われるような事件がなくてどかだったのか、幼稚園の行き帰りは近所の郁也ちゃんと手をつないで、バレエ教室には一人で駆け出していったように思う。

ちよつと怖いくらい崇高な感じのする先生が、幼稚園の先生のニコニコ笑顔とは違う「ほのかな微笑」を、すつと伸びた首の上にたたえながら、「アン・ドゥ・トロウ」と澄んだ声を響かせて様々なポーズを教えてくれた。靴はちゃんとそろえる、挨拶はきちんとする、練習はさぼらないなどけつこう厳しかったけれど、本物のトゥシューズを履いて、ピンと張ったチュチュを身に付けて、音楽に乗って舞い踊る……美しいバレリーナを夢見ながら練習に励んでいた。今思うと、わたしの練習など練習のうちにも入らず、発表会と称して衣裳を作らされる母の方がよっぽど大変だっただろう。

それに、これは後でわかったことだが、わたしたちがやっていたバレエは子ども向けの「童謡バレエ」というものだったらしい。どうりで、流れる音楽が「ツクシの小坊主」や



「トンボのめがね」や「アジサイ花手まり」といった童謡の類だった。そうとも知らず、本格的なバレエの一步を踏んでいると思ひ込んでいたわたしは、毎週土曜日にお稽古があるので（「童謡」ではなく）「土曜バレエ」だと勘違いしていた。だから、土曜日のお稽古が火曜日に移ったときは当然のごとく「火曜バレエ」になったと思ひ、近所のおばさんに聞かれたときも大いばりで「火曜バレエを習っている」と説明した。おばさんはそれを「歌謡バレエ」と受け取ったのだろう、後日、母は「みさこちゃん、歌謡曲に合わせて踊ってるんですってね」と言われたそう。

お山の上

幼稚園の中で一番魅力的だった場所といえば、迷わず「お山」を挙げる。どの遊具にも増して、園庭の片隅にあるこんもりとした小さなお山は、子どもたちの冒険の場であり、ごっこのお話が生まれる所であり、ないしょの話の種が埋められている場所であった。今思えば、大人の背丈ほどの低木が植えられ、木でできた手すりがつけられただけの、登って降りる程度の小山なのだが、子どもたちにとってそこは特別な場所だった。先生の目が届かず、低木とはいえ陽射しがさえぎられ、湿り気のある土の匂いがする小山は、年少さんや幼稚園に来て間もない子どもには入りにくく、それだけに子どもたちだけで小山に登れるようになるのが誇らしかった。年長になると、幼稚園の遊具をすべて遊びこなしたわたしたちはしょっちゅう小山に登り、つつじの花や葉っぱや棒切れや、地面から這い出し

てきた小さな虫を相手に数々のお話をこつこに仕立てて遊び込んだ。

学生時代、附属幼稚園の観察をさせてもらったとき、わたしはよく子どもたちについて「お山の上」に行った。こちらは同じく「お山」とはいうものの園舎から離れた本当の小山で、てっぺんには銀杏の大きな木がある。木漏れ日が降り注ぎ、ざわざわとこずえが歌い、秋には金色の葉が舞う木の下で、子どもたちは飽くことなく遊び続けていた。その様子を見ながら、何度となくわたしの胸中にはあの頃の小山が、小山で遊び込んだ記憶が蘇った。小山というだけで規模も雰囲気も違うのだけれど、人や物や建物が与えてくれる力とは異なる、静かさや厳かさ、温もりや安らぎやときめきが、小さな自然の中に共通して息づいていたように思う。

だから、附属幼稚園のお山の銀杏を切る計画に対して子どもたちのために体を張って木を守ってくださった先生がいらしたことを聞いた時、子どものことを学ぶ学生として感銘を受けたことはもちろんだが、同時に、心の奥で幼い頃の小さなわたしもまた拍手喝采したのだった。

今、振り返って

子どものことを大学で学び、本を読み、人の話を聞き、みずからも研究する中で、「子ども」について詳しくなくなった気がすると同時にますますわからなくなることもある。断定したり結論づけたりすることが難しくなっている。保育者向けのテキストには、確かに

「すべり台で遊ぶときの注意」などを書き込む。子どもが遊ぶ場では怪我をしないように配慮する、というのが保育の鉄則だ。けれど、そんなことを書いている最中に、包帯頭を得意げに幼稚園に通う小さなわたしがふっと顔をのぞかせる。まるで、盲腸の跡を誇らしげに見せているマドレーヌのように……。なんでもプロにまかせて早期に教え込もうとする昨今の稽古事ブームを見ると、この世界の入口で体験してほしいことがもつとたくさんあるのに……と批判したくもなる。が、そんなときも、プロのバレリーナの先生を見ながらますますバレエへのあこがれを強めていた小さな自分を否定する気にはなれない。草の匂い、土の感触、園舎からも先生の目からも離れて小さな自然が遊び相手をしてくれる、あの魅力的なお山が幼い者たちにとってどれほど大切な場所だったか……身体記憶の底から呼び覚ますことはできても、きちんと言語化して論じることが難しい。いや、たとえそれができたとしても、言葉にした途端に抜け落ちるものがある。それが、一番大切な何かであるのに……。

幼稚園という、子どもが初めて経験する集団生活の場で、まだ土踏まずができあがっていない幼い子どもたちは、それぞれにどんなふうにも地面を踏んで歩き出しているのだろう。それは、地面に足がついてしまったわたしたち大人が想像するのとは、どこかちよつとずれているのかもしれない。だから、いいのだ。小さな者たちの感覚が謎めいた風のように言葉の隙間を吹き抜けていく、子ども研究にもそんな風の抜け道を残しておきたいと思つた。

(聖学院大学)